OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	屏風祭の変遷
Author(s)	岩間, 香
Citation	デザイン理論. 1994, 33, p. 94-95
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52839
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

屏風祭の変遷

岩間　香／摂南大学

屏風祭は祇園祭の宵山に各家で秘蔵する屏風を見せる伝統行事である。山鉾巡行をはじめとする祭礼行事が国の文化財に指定され，各町単位の保存会により行われているのに対し，屏風祭はあくまで個人の自由意志で各家や会社を単位におこなわれる。屏風祭に関してはこれまで断片的な紹介はあるが，歴史的な変遷を考察したものはない。

【1】 祭りや特別の催しのときに屏風を飾り，その前で見物をするという習慣は古くからみられる。桃山時代に描かれた狩野内膳筆「豊国祭図」では，仮設の桟敷のうしろに屏風をたてて見物している。17世紀中期の祇園祭を描いた海北友雪筆「祇園祭礼図」をみると，通りに面した部屋に屏風をたてて祭見物をしている。こうした場面は「住吉祭礼図」や「朝鮮通信使図」にも描かれており，町家で祭りや行列を見物する時の作法であったことがわかる。

屏風祭の史料上の初見は本居宣長筆『在京日記』宝暦6年（1756）の条で，「よみやには……金屏風ひきまはし，毛氈しき，燭台ともしなと，をのかしゝかさりたて，親類など招いた」とあり，同7年『山鉾由来記』にも祭礼の町々が「金銀屏風，羅紗毛氈のたぐひ，他にをとらじと粧ひかざりて客をまふく」とある。すなわち18世紀中期には，宵山における接待の場の飾りとなり，豪華さを競うようになっていたことがわかる。

しかし具体的に近世の屏風祭の屏風の作者や画題を記録したものはなく，天保年間（1830-44）の作とされる「祇園祭礼図」屏風（個人蔵）に，金地墨画の山水画や淡彩の花鳥画，書屏風が描き込まれているのが唯一の資料である。画中画とはいえ書屏風が多く，幕末の文人書画の愛好を反映している。

近代になると，明治27年（1894）の「京都祇園会図絵」に「金銀書画の屏風を建て廻らし，或は珠簾を垂れ，花氈を敷き，銀燭硝燈を点じ，或は生花，或は盆栽を陳列し，以て来賓を響す」とあり，活け花や盆栽など飾りの要素が増え，ランプなどの照明が発達し，宵山を華やかなものにしたことが窺える。

【2】 屏風祭に飾られた屏風の画題や作者が明らかになるのは，明治35年の新聞記事が最初である。当時山鉾巡行は7月14日の前祭と24日の後祭の2回行われたが，後祭の方が立派で有名な屏風が展観された。記事は後祭の宵山に行われた屏風祭の中から33点の屏風をリストアップしている。

それによると大多数が江戸時代とそれ以前の作で，「桃山百双内」，雪村，友松，伊年印など桃山から江戸初期の作品がかなり含まれていた。各画派のうちでもっとも多いのは応挙，呉春などの円山・四条派の画家で，ついで文人画および狩野派などの漢画，さらに琳派とつづく。また幕末・明治の流行を反映して文人画が多く，その半数以上は蕪村であるのが興味ぶかい。京の人びとは中国趣味の大雅より，俳画の祖としても知られる情趣の豊かな蕪村を好んだのであろう。

ついで明治44年の新聞記事には，屏風のリスト111点が掲載されている。屏風祭はこの頃がもっとも盛んであったと思われ，応挙筆

「雪松図」など名だたる作品が展観されている。画家の傾向としては江戸期の画家が大多数をしめ，存世の書画家は富岡鐵斎ひとりにすぎない。画派別にまとめると，円山・四条派が53点と半数近くをしめ，ついで琳派，漢画，文人画，岸・原派とつづく。明治35年の記事と比較すると，京都で活躍した画家が増え，また幕末から明治初期にかけて活躍した画家が，この頃になって一定の評価を受けはじめている。

【3】 屏風祭には，屏風を飾るだけでなくさまざまの趣向がみられる。明治38年には貸し盆栽屋が登場するほど盆栽が流行し，これが下火になると朝顔，ついで西洋花に変わっている。また明治30年頃から碁・将棋盤を置くことが流行し，34年には盤のおいていない所はほとんどないといわれるほどになった。

明治38年あたりからは，造り物と音曲が流行しはじめた。四条京極かいわいの店では楽隊の演奏や，ロシアの軍艦が轟沈して火花を散らす造り物が人気を呼び，「十合呉服店」ではトップモードの人形飾りがあったという。またガラスの塔から噴水が落ちたり，ガラス製の小自転車の輪が水で回る造り物などがあった。さらに大正3年（1914）には流行の飛行機があちこちで造り物になるなど，しかけや造り物は流行を敏感に反映し，しかも夏らしい趣向を競っている。

さらに明治40年代，蓄音機が普及しはじめると，またたくまに広まった。品がいいと称された後祭の中京でも幕のうちからレコードが聞こえない所はなかった。45年になっても新聞によれば「去年に引続き碁将棋よりは蓄音機の世となりて奈良丸の浪花節に少しく雲右衛門の交りしが変れど，其数はいよいよ夥しかりき」というありさまで，新聞は屏風祭ならぬ蓄音機祭だと書いている。

【4】 明治末期は文展が開催されるなど，日本画壇にとってもめまぐるしい時期で，新聞にも「現代」作家の絵についての記事が多く見られるようになった。この頃から屏風祭のために新たに画家に屏風を依頼するということが，京都の富商の間で流行しはじめた。例えば大正4年の新聞は吉田忠三郎（吉忠）が横山大観の寒山拾得，谷口香嶠の橋弁慶の新作を描かせ屏風祭に出品すると報じている。残念ながら大観の屏風は作品リストに漏れているようで，図様も明らかではない。

しかし大作がいきわたると個人や商店の注文による新画制作の動きはにぶくなり，かわって表具屋が新画制作の主役になった。当時の表具屋は表具だけでなく，今日の美術商的な役割をはたしていた。はやく明治36年に表具屋の春芳堂が多数の新画をならべた屏風祭をおこなっている。ついで大正3年には墨光堂も参加し，大正5年には両者の展示が新聞記事に紹介されている。すなわち「春芳堂は栖鳳の新作軸を中心に現代作家の作品をならべた。いっぽう墨光堂は竹泉の書による煎茶道具一式をととのえ披露した」。大正6年にはさらに多くの表具師が参入し，新画の展示を競った。こうした表具師の展示ははじめは屏風祭らしく屏風中心であったが，同6年には掛け軸のみの展示となり，そのまま新作展示会として販売されている。

屏風祭の話題が新聞紙上をにぎわせたのはこの頃までであった。大正7年，国画創作協会（国画会）がおこり，全国的にセンセーションをまきおこした。この国展を「吉忠」などが後援したことは知られているが，しかし屏風祭に展観される屏風は，しだいに画壇の最新の動きを反映しなくなる。展覧会がふえ，屏風祭が果たしていた美術展としての役割はさほど重要ではなくなったのである。